

修士論文概要書

高校留学生の「ことばの学び」を支援する日本語教育とは何か  
—実感に支えられた日本語使用経験の構築をするために—

井上 貴子

早稲田大学大学院日本語教育研究科

## [目次]

第1章 序論

第2章 本研究の理論的背景と先行研究

第3章 [調査1] RQが生成されるまでの経緯

第4章 [調査2] RQ1 高校留学生のことばの学びとは何か

4.1 [調査2] 高校留学生Aのことばの学びとは何か

4.2 [調査3] 複数言語環境の中で暮らすJのことばの学びとは何か

第5章 RQ2 高校留学生のことばの学びを支援する支援者のあり方とは何か

第6章 考察

第7章 結論

[参考文献]

## 第1章

### 研究の背景

本研究では、高校留学生一人ひとりのことばの学びを育むための支援のあり方を、筆者と高校留学生を取り巻く支援者とともに考え、そして、他の支援者にも提言するものである。

筆者は、2004年8月から2005年7月までの約1年間、タイで高校留学を経験した。そして、2010年8月から2011年1月までの約4ヶ月間、筆者の実家で、ブラジル出身の高校留学生A(以下:A)の受け入れ家庭を経験し、Aと出会った。Aは、ほとんど日本語が話せない状態で、日本での生活を始めることになった。そのためにAは、日本での生活を送るにあたり、意思の疎通ができないことへの葛藤を抱くようになっていった。筆者は、Aと関わる中で、高校留学を経験し日本語教育の立場にいることを活かし、できる支援とは何かを考えるようになっていったのである。

### 高校留学における日本語教育の問題の所在

筆者は、高校留学における日本語教育の現状を把握することを目的に、C先生<sup>1</sup>と支援者D<sup>2</sup>に対して、インタビューを行ってきた。インタビューを通して、高校留学における日本語教育の現状から見えた問題意識をまとめる。

まず、C先生は、高校留学生に対する日本語授業を行うことへの葛藤を抱えている、ということである。日本語授業を担当することになったC先生は、それまで培ってきた専門性

---

<sup>1</sup> Aが通う高校で、高校留学生に対する日本語授業を担当する日本語授業担当者。日本語教育を専門外とし、普段は、高校生に音楽を教えている。

<sup>2</sup> Aの受け入れ家庭経験者

に加えて、新たな教育的対応が求められる。C先生は、新たな教育的対応を模索する中で抱く葛藤があったのである。また高校留学生は、正規の学生とは違い、単位の互換<sup>3</sup>が認められていない。そのために、単位の互換が認められていない高校留学生への支援に対して、重要視されていないという現状にあることが分かった。

そして、支援者Dも同様に、高校留学生の支援に対する葛藤を抱いていることが分かった。仕事と家事との両立に加え、海外からの高校留学生を受け入れることへの責任が、高校留学生の支援に対し、葛藤を抱く原因にもなっていたのである。

筆者は、高校留学生を取り巻く支援者らに行ってきたインタビューから、高校留学生の支援に対しての理解やモチベーション不足、などの理由で、高校留学における日本語教育に消極的な姿勢にあることが分かった。

筆者は、このような現状を踏まえ、高校留学を経験し日本語教育の立場にいることを活かし、できる支援とは何かを考えるようになっていった。そして、高校留学生の支援に対して、否定的に捉えている支援者に向け、支援のあり方を問い直す必要があると考えた。

#### 研究内容 RQが生成されるまでの経緯

筆者は、Aの支援を継続していく中で、高校留学生に対する支援のあり方を模索してきた。また筆者は、Aの支援と同時期に、早稲田大学大学院日本語教育研究科の実践授業である日本語教育実践研究(1)「にほんご わせだの森(以下:2010秋森)」に参加した。筆者は、2010秋森に参加し、自身が抱く教育観を問い直すことができた。そして、2010秋森での実践が、高校留学生に対する支援のあり方とは何かに対する考えを問い直すことにも繋がり、本研究のリサーチクエスチョン(以下:RQ)が生成された。

RQ1: 高校留学生のことばの学びとは何か

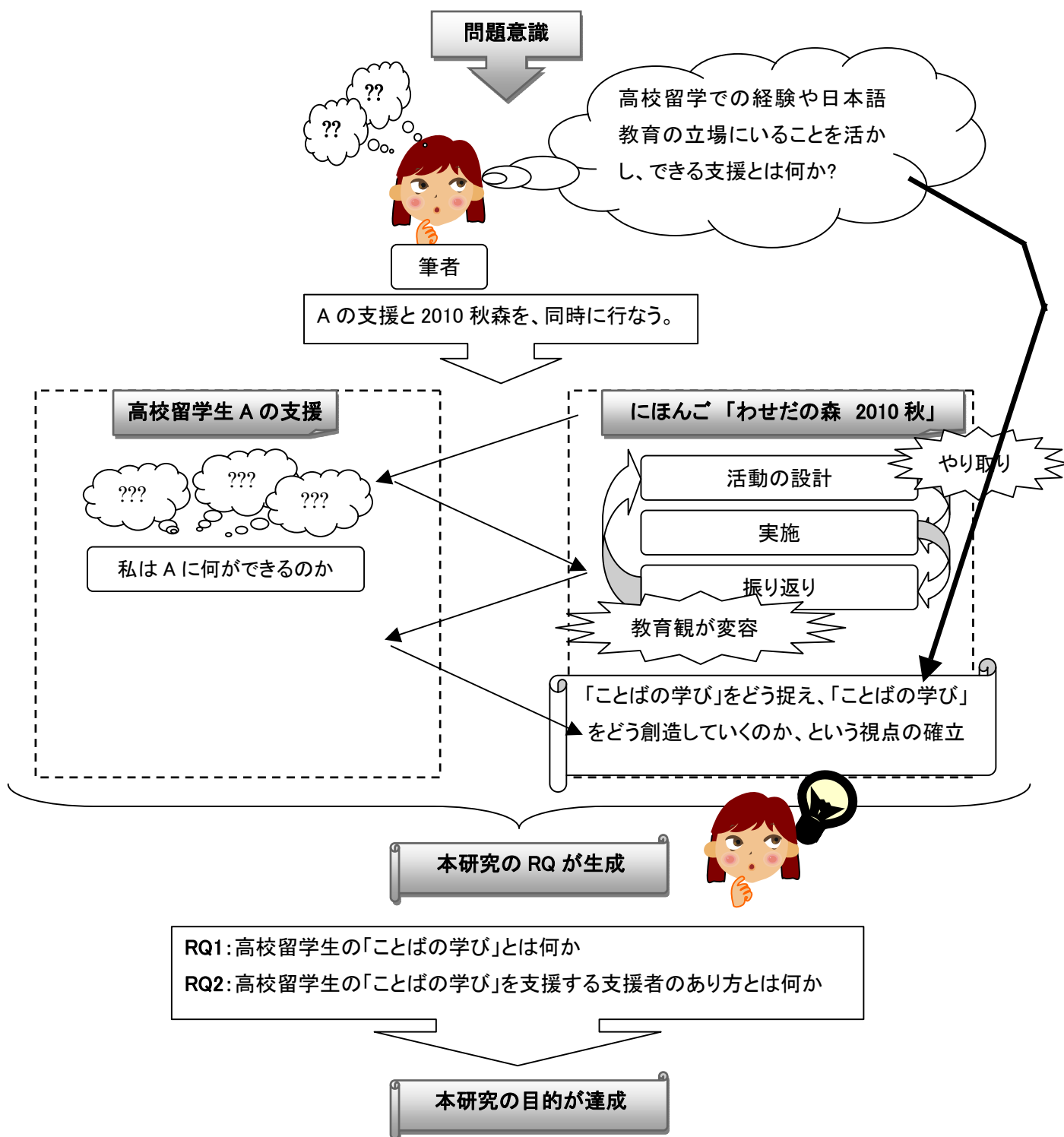
RQ2: 高校留学生のことばの学びを支援する支援者のあり方とは何か

図1では、「高校留学を経験し日本語教育の立場にいることを活かし、できる支援とは何か」に対する問いから、本研究のRQが生成されるまでの経緯を視覚的に示したものである。

---

<sup>3</sup> 高校留学では、外国の高校での履修を、国内の高校での履修とみなし、進級に必要な単位として認定することができる。ただし、この「留学扱い」を認めるかどうかは、その高校の方針によっても異なる(財団法人 AFS 日本協会 HP 参照)。Aが通う高校では、「留学扱い」として、単位の互換が認められていない。

図1 RQが生成されるまでの経緯



## 本研究の目的

本研究では、「高校留学における日本語教育の可能性を提示する」ことが目的である。

筆者は、高校留学生を取り巻く支援者らに行ってきたインタビューから、高校留学生の支援に対してのモチベーション不足、などの理由で、高校留学の日本語教育に消極的な姿勢にあることが分かった。すなわち、高校留学生一人ひとりの姿を見ることが、困難な状況にあったのである。

このような状況を踏まえ、本研究では RQ1「高校留学生のことばの学びとは何か」を明らかにし、高校留学生一人ひとりのことばの学びに行き着くまでの経緯を示す。続く RQ2では、「高校留学生のことばの学びを支援する支援者のあり方とは何か」を明らかにし、高校留学生に対する支援を否定的に捉えている支援者に向け、支援のあり方を問い直すきっかけを与える。これら 2 つの RQ を明らかにすることで、本研究の目的が達成できると思われる。

## 第 3 章 第 4 章 第 5 章

### <4 つの調査>

本研究では、2 つの RQ が生成されるまでの経緯と 2 つの RQ を明らかにするために 4 つの調査を行った。

まず第 3 章では、本研究の RQ が生成されるまでの経緯を、2010 秋森の実践から分析を試みた(⇒【調査 1】)。続く第 4 章では、第 3 章で行った【調査 1】を通して生成された RQ1「高校留学生のことばの学びとは何か」に対する答えを明らかにする。RQ1「高校留学生のことばの学びとは何か」に対する答えを明らかにするために、A の支援(⇒【調査 2】)と幼少期の言語形成期に複数言語環境で成長、なおかつ、高校留学を経験してきた J のインタビュー(⇒【調査 3】)から、分析を試みた。第 5 章では、RQ2「高校留学生のことばの学びを支援する支援者のあり方とは何か」に対する答えを明らかにする。RQ2 に対する答えを明らかにするために、高校留学生の受け入れ家庭経験者に対して行ってきたインタビュー(⇒【調査 4】)から、分析を試みた。

## 第 6 章 考察 調査のまとめ

第 6 章では、4 つの調査のまとめを行った。

### 【調査 1】のまとめ 「RQ が生成されるまでの経緯」

#### 一 2010 秋森実践前に抱く教育観

筆者は、A の支援を行うにあたり「留学経験もあり、今日本語教育を専門とした大学院に行き、日本語教師になりたいと思っている私は、A のために何をすることが出来るだろうか(2010/10/16 筆者/観察記録)」と、発言している。ここでの発言から、これまでの経験を活かした支援とは何かを模索していることが分かる。そして筆者は、「日本語を教えることさ

えできなかった(2010/10/16 筆者/観察記録)」と、発言している。A に日本語を教えることが、筆者が考える「高校留学での経験や日本語教育の立場にいることを活かし、できる支援とは何か」に対する答えであると考えていた。つまり筆者は、ことばの学びとは何かということよりも、自分の持っている知識を口で説明したり、できることをやってみせるということに視点があった。また、参加者一人ひとりの発話された量といった、目に見える形で、客観的に測れる日本語能力だけに注目し、それが、ことばの学びであると考えていたのである。

### 一 2010 秋森実践後に抱く教育観

筆者は、2010 秋森に参加し、活動の設計、実施、振り返りを繰り返し行ってきた。筆者は、2010 秋森の実践者と振り返りのサイクルの過程において、それぞれの実践の理念を問い、自らの実践に対して「なぜ」という批判的な目を持つことを要求(細川 2009:71)してきた。そして、2010 秋森を継続していく中で、自身の教育観を問い直すことにも繋がっていたのである。

改めて、筆者が考えることばの学びとは、他者との関わりの中で、ことばを学ぶことであるとする。筆者は、2010 秋森の実践を継続していく中で、参加者は、与えられた知識だけを吸収するのではなく、自分自身の経験からことばを獲得していくことが、ことばの学びに繋がっていくものであるということに気付いた。ことばの学びを構築していく過程の中で、他者の存在は大きな意味を持っていたのである。参加者は、他者とのやり取りの中で再度自己と向き合い、自分なりの意味を構築していく。参加者一人ひとりが、ことばを学ぶ過程やことばを学ぶことで得られる意味の構築は、異なると言える。

また、ことばの学びを「今、ここ」だけに着目するのではなく、参加者一人ひとりの「今、ここ」での学びが、「これから」の生活と、どのように繋がっていくのかをも視野に入れた学びに着目することが、必要であると言えよう。

筆者は、A と向き合うだけでは自身が抱く教育観を問い直すことができなかった。そして筆者は、自身が抱く教育観を問い直すことにより、参加者一人ひとりの「ことばの学び」をどう捉え、「ことばの学び」をどう創造していくのか、という視点を持つことができるようになっていった。ことばの学びへの視点を抱くようになった筆者が、その具体的な様相とそのためにできることを明らかにしたいと考えたことから、本研究の RQ が生成された。

### 【調査 2】のまとめ RQ1 「A のことばの学びとは何か」

【調査 2】では、RQ1 「高校留學生のことばの学びとは何か」を明らかにするために、筆者が行ってきた A の支援と支援者 D の語りをもとに分析・考察をしてきた。

### 一 A が周囲の場に参加する中で抱く葛藤

A は留学当初、日本での生活を送るにあたり、ことば、食事、友だちづくりの面で、周囲

の場に参加する葛藤を抱えていたことが、支援者 D のインタビューによって分かった。支援者 D は、「食事は本当に大変。(一略)そして、ことば。私は英語が話せない」と、発言している。ここでの発言から、A は、母国との食生活の異なりやことばによる意思の疎通ができないことへの葛藤を抱えていることが分かる。また支援者 D は、「そして友達を作りたい」と、発言している。A は、学校の友人と意思の疎通をすることが困難な状況であった。そのために、学校の友人と繋がりを持つことができず、週末になっても家にいることが多かったと、支援者 D は言う。高校留学生は、ことばの壁だけではなく生活習慣や価値観、社会的ルールまですべてが今までとは異なる世界に囲まれる。これまでとは異なる環境の中で、生活をしていくことへのストレスは大きいということが、D のインタビューによって分かった。

### 一 葛藤を乗り越えるためのことば

しかし A は他者の存在によって、少しずつではあるが、自分の気持ちをことばを使って他者に伝えることができたのである。

筆者は、「ことばの学び」は、「他者とのやり取りする」ことで活かされる力であり、社会と異なった背景を持つ人々とともに、生きていく力そのものであることを述べてきた(これは、「第 2 章 先行研究」と【調査 1】を通して得られた知見から参照)。A のことばの学びが起こる背景には、他者の存在が大きな役割を果たしていた。ここで言う他者とは、高校留学生 M<sup>4</sup>(以下:M)と支援者 D である。

A は、M とのやり取りから、日本で生活を送る中で、新しい目標を見つけ「これから」の生活をも肯定的に捉え直すきっかけにもなっていることが分かった。そして A は、支援者 D とのやり取りから、日本で生活を送る中で抱く葛藤を克服するきっかけにもなっていたのである。

他者の存在が、A のことばの学びをいかに大きく引き伸ばしたかを示す興味深いものであった。「自分が思ったこと」を話したいと思う相手がいることで、自身が抱く葛藤や思いを表出することができた。そして、他者のことばを受け取ることで、A のことばの学びが徐々に伸びていったと考えられる。また、ことばの学びが伸びるに伴って、自分を周囲に理解してもらうことも可能になり、受け入れ家庭や学校の友人との関係が育まれていくと、ことばを使う機会が増え、ことばの能力も伸長していったとすることができる。

この時のことばとは、言語知識としての言葉ではない。A が周囲の場や他者への参加を繰り返し行う中で抱く葛藤や、日本での生活を前向きに捉え直すために必要となるものである。高校留学生が伝えたいことを伝え、自分を表現するためのことばを獲得し、他者に伝えることであると考えている。単に、発話された量や目に見える形で、客観的に測れる日本語能力が伸びていった変化を意味するのではない。いかに A が、周囲の場や他者への参

---

<sup>4</sup> ハンガリー出身の高校留学生。2010年3月に日本に來日し、調査時は18歳であった。A と一番仲が良い高校留学生である。

加を深める中で抱く葛藤や、それを乗り越えるための力としてのことばを使うようになったのである。川上(2009:305)は、多様化する子どもたちに対して、決まった指導法があるわけではなく、それを求めすぎると現実の子どもの様子が見えなくなるということを指摘している。ここでの指摘から、かれらが、日本での生活を送る中で抱く葛藤を見過ごさず、一人ひとりがどのように、ことばを獲得し成長しているのか、に目を向けることが支援者に、求められる能力であると考えられる。

### 【調査3】のまとめ

#### RQ2 「複数言語環境の中で暮らす高校留学生だったJのことばの学びとは何か」

筆者は、高校留学生のことばの学びとは何かを明らかにするためには、高校留学を経験している当事者の子ども以外に、このような経験を持つ大人が自らの成長や高校留学での経験についてどう認識しているのかを糸口を考えるのが適当ではないかと考えた。

そのために【調査3】では、複数言語環境の中で暮らすJの「高校留学前」「高校留学中」「高校留学後」のことばの学びの変容をインタビューの語りをもとに分析・考察をした。

#### 一 「高校留学前」のJ

Jは、タイ人の父親と日本人の母親を持つ。そのためにJは、家庭内でも日本語を話せる環境にあった。それにも関わらず、高校留学前のJは、積極的に日本語を話そうとしてこなかった。日本語とタイ語という、2言語間を行き来するのは労力を感じ始めたことが、日本語使用を肯定的に思うことができない原因であったと考えられる。また、Jは、日本語に加え日本に対しても肯定的に捉えることができなかった。Jは成長するにつれて、徐々に自身の複数言語経験と向き合い、周りとの異なりを意識し始め、葛藤を抱いていったと考えられる。しかしJは、高校留学を機に、自身の日本語使用経験を肯定的に捉えることができるようになっていった。

#### 一 「高校留学中」のJ

なぜJは、自身が抱く複数言語に対する気持ちが、高校留学を機に、変化していったのだろうか。変化の理由として、高校留学中に会った、受け入れ家庭や高校の友人との繋がりが、原因であると考えられる。高校留学前のJは、日本と日本語に対して、肯定的に捉えることができなかった。しかしJは、他者との関わりを深める中で、自身が抱く日本語使用経験を、肯定的に捉えることができるようになっていった。Jは、受け入れ家庭や学校の友人と良好な関係を築きたいという思いが、日本語を勉強することへの意識に繋がっていったのである。



## 一 「高校留学後」のJ

Jは、高校留学を機に得た学びは、日本や日本語に対する心境の変化だけではない。Jは、高校留学を機に高校留学後の生き方に影響を及ぼしていたことが、インタビューの語りによって分かった。Jが、自身の日本語使用経験を問い直し、成人後の人生全体に長く深く関わってくるまでには、そこでの日本語使用経験が実感に支えられているかどうかが重要であると言える。Jは、自身を理解してくれる他者と出会い、「日本語を使いながら自分の思いや考えを表現し、それが相手に理解されるという実感に支えられた日本語使用経験とそれに伴う人間関係を構築」(尾関・深澤・牛窪 2010:18)することができた。それにより、Jの**ことば**の学びやこれからの生き方に影響を及ぼしていたとすることができる。

### 【調査4】のまとめ

#### RQ2 「高校留學生の**ことば**の学びを支援する支援者のあり方とは何か」

ここでは、高校留學生の**ことば**の学びを支援する、支援者との関係性について考えていきたい。AとJの、**ことば**の学びを促進した過程において、高校留學生を取り巻く支援者らの関係が、大きな意味を持っていた。果たして、高校留學生の**ことば**の学びを支援する支援者のあり方とは何だったのか。支援者側の視点である、支援者Dの語りをもとに分析・考察をしてきた。

#### 一 支援開始当初に、支援者Dが抱く支援に対する心境

支援者Dは、Aの支援開始当初、支援に対し肯定的に捉えることができていなかった。これは、3つの理由が挙げられる。1つ目に、仕事と家事との両立の難しさ、そして、Aの支援を行うことへの責任が挙げられる。2つ目に、これまで行ってきた高校留學生に対する支援も影響していることが挙げられる。3つ目に、高校留學生と**ことば**による意思の疎通ができないことへの葛藤が挙げられる。支援者Dは、**ことば**による意思の疎通ができないことへの葛藤を克服するために、日本語を教えることに重きを置き支援を行ってきた。つまり支援者Dは、日本語を教えることが、支援のあり方であると考えていたのである。しかし、このような教育観は、Aには受け入れられなかった。支援者Dは、Aとどのように向き合うべきか、迷いながらも、支援を継続してきたことが、インタビュー時の支援者Dの様子から感じられた。

#### 一 支援者Dの支援に対する心境の変化

支援者Dは、同じ高校留學生の受け入れ家庭経験者である支援者L<sup>5</sup>の語りを聞いたり、Aの支援を継続したりしていく中で、高校留學生の視点を持ち支援を行うようになっていった。支援者Dは、Aと寄り添いながらも、Aの視点に立ち、押し付けではない支援を行う

---

<sup>5</sup> これまでに3回、高校留學生の受け入れ家庭を経験してきた。支援者Dと支援者Lは友人同士である。

ことができるようになっていたことがインタビューの語りから分かった。高校留学生の視点を持つということは、言い換えれば、高校留学生に寄り添う支援、高校留学生の味方になるということである。つまり、A と支援者 D は、相互作用的に関係性を構築していったとすることができる。

## 第7章 結論

ここでは、2つの RQ に対する答えを記述する。

### 一 RQ1 への答え

RQ1 は、「高校留学生のことばの学びとは何か」であった。先行研究と【調査2】と【調査3】の分析結果から、RQ1 への答えをまとめると、次の3点を導き出すことができる。

#### 答え

- (1) 高校留学生のことばの学びを、客観的な日本語能力で測ることはできない。また、高校留学生一人ひとりが、ことばの学びを構築していく過程の中で得られる意味の構築は異なる。
- (2) 高校留学生一人ひとりのことばの学びを育むためには、「他者」が大きな役割を果たしている。
- (3) 高校留学を経験し得られた学びは、かれらが、高校留学後の生き方や進路を考えるようになったとしても、あらゆる形で繋がっていくものである。

### 一 RQ2 への答え

RQ2 は、「高校留学生のことばの学びを支援する支援者のあり方とは何か」であった。高校留学生のことばの学びを支援する支援者との関係性について 6.4 で、考察してきた。先行研究と【調査4】の分析結果から、RQ2 への答えをまとめると、次の1点を導き出すことができる。

#### 答え

- (1) 高校留学生一人ひとりの成長過程における、ことばを学ぶ意味を見出していくためには、そこでの日本語使用経験が実感に支えられているかが重要である。

筆者は、RQ1「高校留学生のことばの学びとは何か」とRQ2「高校留学生のことばの学びを支援する支援者のあり方とは何か」を明らかにしてきた。そして、2つのRQを明らかにし、高校留学における日本語教育の可能性を提示することが、本研究の目的であった。

そこで、明らかになったことは、以下のことである。

## 一本研究の目的に対する答え

高校留学生一人ひとり、周囲の場や他者への参加を深めていく中で、様々な葛藤にぶつかりながらも、必死にことばを学ぶ意味を構築していることが分かった。このような高校留学生に対し、日本語教育に求めることは、高校留学生一人ひとりの成長過程における、ことばを学ぶ意味を見出していくための、実感に支えられた日本語使用経験を重ねていくことが必要である、ということである。

青年期にあたる高校生は、「心理的安定と不安定」(秋山 1998:48)を、繰り返す時期であると言われている。すなわち高校生は、将来の目標を見出したり、将来のために何かを努力したりすることが、なかなかできない状態に陥ってしまうのである。このような高校生は、高校留学を経験し、これまでとは異なる環境の中で、現地で出会った人との生活を送ることになる。そのために高校留学生は、これまでとは異なる環境の中で、生活を送ることで抱くストレスは大きいと言えよう。

しかし支援者は、高校留学生が抱える葛藤は、言語知識の不足が原因であると考えている。そして、高校留学生の言語知識の不足を補うために、日本語の知識をいかに効率的に習得させるための方法を模索することに重きを置き、支援を行ってきた。すなわち、支援者側の視点に立ち、支援を行ってきたのである。

筆者は、高校留学生に対する支援を否定的に捉えている支援者に向け、本研究では 2 つの RQ を設定し、調査を行ってきた。

調査の結果、かれらが必要とする日本語能力は、単に日本で生活を送る中で必要となる語彙力や文章力と言った、客観的に測れる日本語能力だけではない、ということが分かった。また、高校留学生は、他者とのやり取りの中で「今、ここ」での葛藤と向き合い、言いたいことや伝えたいことを表現し、それが相手に理解されたという実感に伴う日本語使用経験を重ねていったのである。すなわち、自分の言いたいことや伝えたいこと、また、ありのままの自分を表現したいと思えるような、他者との関係性があったからこそ見えた学びであると言える。支援者と高校留学生、そして、筆者とのやり取りや働きかけ自体が、相互作用的に変化せざるを得なかった、とすることができる。もし一方でも、相手との関係を無視して、固定的な見方や態度で臨めば、このような関係性は生まれなかったと言えよう。支援者と筆者が、高校留学生を認めようとしていく姿勢があったからこそ、その関係性や実践が可能になったとすることができる。

それゆえ、日本語教育の現場に求めることは、かれらが、周囲の場や他者への参加を深めていく中で、様々な葛藤に直面しても、必死にことばを学ぶ意味を見出していくための支援を行うことである。これまでの調査の結果から、高校留学生一人ひとりのことばの学びを支援するためには、語学の教育だけを押し付けるだけでは、充分ではないことが分かった。つまり、高校留学生を取り巻く支援者らは、高校留学生が変わらなければいけない、努力しなければいけないという意識で支援を行うことが支援のあり方ではない。実践を通

して、支援者や筆者がともに成長し、かわっていかねばいけないのである。

### 今後の課題と展望

本研究をとおして実現されなかったことがいくつかある。以下に、本研究における今後の課題を2つ述べ、展望を述べることにする。

筆者は、本研究で受け入れ家庭経験者を対象に、高校留学生に対する支援のあり方を模索してきた。しかし今後は、同じように高校留学生の支援に対する支援を行うことへの葛藤を抱く、日本語授業担当者の声も反映すべきである。そのために、日本語授業担当者と日本語教育双方が、高校留学生に対する支援のあり方を模索していくことが、1つ目の今度の課題として挙げられる。

2つ目に、高校留学生に対する支援を否定的に捉えている支援者に、どのように発信していくかという課題である。本研究は、高校留学生に対する支援を否定的に捉えている支援者に向け、高校留学における日本語教育の可能性を提示したいという思いからスタートしている。本研究では、高校留学における日本語教育の意義や可能性を提示できたものの、実は、本研究を手にする読者は、むしろ高校留学における日本語教育に興味のある読者であることが想像できる。高校留学生に対する支援を否定的に捉えている支援者に、どのように発信していくかが、今後の課題であると言える。

以上の2つが、本研究では実現できなかった課題である。本研究は、これで終わりではない。筆者自身が教師として成長し続けていくための、スタート地点でもある。学習者を支援していく力、他の教師と協働していく力、実践成果を発信していく力、その全てを身に付けていくことが、筆者が自身に求める成長である。時間を要する課題ではあるが、一歩一歩、確実に歩んでいきたいと考えている。

今後も引き続き、高校留学における日本語教育の研究を行い、様々な点を議論し続けていきたい。